

# 〈地元〉の不変性とダイナミズム

—— 〈地元〉周縁に生きる沖縄の下層若者から ——

打越 正行

首都大学東京

karp@mail.goo.ne.jp

沖縄の下層若者は、グローバル資本主義下の植民地的暴力とそれゆえの経済的困窮や生活世界の侵食に直面している。それに対し、暴走族などに属する一部の若者はその生活世界である〈地元〉を拠り所に同世代の仲間たちと生き抜いてきた。本稿において〈地元〉とは、中学校区程度の規模の同世代の若者により、数年にわたり活動が行われている実体的な場所と定義される。他方で、現在の沖縄には、その〈地元〉にさえ拠り所を持たずに生きる下層若者がいる。本稿は、彼・彼女らの生きる世界から、既存のコミュニティ概念に替わる〈地元〉概念を提起し、その現代的意義を議論することを目的とする。先行研究では、本稿の〈地元〉にあたるコミュニティが、排除の趨勢ゆえに衰退したもの、もしくはその排除に対する抵抗の拠点、または支配構造を維持する「ガス抜き装置」として扱われる。それらの議論では、真正性の水準にもとづかないために、コミュニティの不変性とダイナミズムは見落される。そこで本稿では、真正さの水準に基づいたそれらの若者の生活世界から、時間と空間を超えた〈地元〉の不変性と、そして彼・彼女らを〈地元〉に接続させる〈地元〉のダイナミズムを指摘した。それは、彼・彼女らの生きる〈地元〉やそれに準ずる場所が、衰退でも抵抗の拠点でも、また「ガス抜き」でもない意義、つまり彼・彼女らを代替不可能な存在とする場所としての意義を指摘する重要な作業であった。

キーワード：沖縄、地元、真正性の水準

## 1 問題提起

沖縄の深夜のゴーパチ(国道58号線)は、ほぼ毎晩、暴走族とそれを見物するギャラリーで盛り上がっている。週末のゴーパチには暴走族が4・5チーム、ギャラリーが100名を軽く超えて集まる。警察もそれらを取り締まるものの、逆にそれらの盛り上げ役を担っているのが現状である。他方で、広島市と関東圏の調査からは、暴走族の数も活動も縮小傾向にあった。その原因は、警察やメディアによる徹底的な取締りだけでなく、若者自身が暴走族に魅力を感じな

くなってきたことによっていた。私は今までに参与観察を通じた暴走族の魅力の変化について、〈地元〉をキーワードに考察してきた。それは裏を返せば、沖縄の暴走族の活動が活発であることを〈地元〉に注目して説明してきたといえる。彼らにとっての〈地元〉とは、(詳しくは後述するが)「いつもの場所」を指し、またそこでは一人ひとりのメンバーがかけがえのない代替不可能な存在として扱われる。彼らはその恒常性と代替不可能性に魅力を感じて、〈地元〉に集まる。例えば、暴走族における先輩のシゴキによる社会化や、暴走族デビューや事故などの出来事(歴史)の蓄積は、メンバーの代替不可能性を生み出す装置となっていた[打越 2008, 2009]。

その一方で、調査の過程では、既存の〈地元〉に属していない多くの下層若者<sup>1)</sup>に遭遇した。彼・彼女らは、キセツ(沖縄を出て数ヶ月間働く派遣労働・季節労働)とギャラリー(深夜の暴走族見物)を繰り返す下層若者であった。彼・彼女らは、暴走族のように既存の〈地元〉を拠り所にしてはいなかった。その結果、個別化されたこれらの若者たちの存在は、流動的な労働力を求める昨今の労働市場に適合的であった。その両者の思惑により、彼・彼女らは、隠蔽、つまり「いなかったこと」にされてきた。

本稿は、彼・彼女らの生きる世界から、既存のコミュニティ概念に替わる〈地元〉概念を提起し、その現代的意義を議論することを目的とする。〈地元〉に拠点をおかず生きる下層若者から〈地元〉をみることの利点は、以下の2点である。1つ、〈地元〉の外側からアプローチすることで、すでにある〈地元〉の機能だけでなく、〈地元〉が成立する条件や外部社会との関係、また〈地元〉への参入／からの離脱／の創出の過程をつかめること。これらによって、〈地元〉のダイナミズムをより深く理解できる。2つ、1つ目と関連するが、これらの〈地元〉のダイナミズムに着目することで、それを通じてさえも変わらないものをつかめること。これによって、〈地元〉の不変性の理解を目指す。まずは、本稿で鍵となる先行研究、また概念の定義と調査方法について概観しておこう。

## 2 コミュニティ概念の検討

都市へ移り住んだ移民や、労働者階級の若者などによるコミュニティの創造とそこでの実践は、今まで都市社会学、文化研究などの領域で強い関心のもと扱われてきた。支配社会から周縁に追いやられた下層若者の一部は自らのコミュニティを形成することでなんとか生き抜いてきた。ただ支配社会との関連で語られるコミュニティの位置づけに関しては、さまざまな議論がある。ある者は、支配社会の趨勢によりコミュニティは衰退したという[L. Wirth 1938=1978]。またコミュニティはいまだに存続しているとみなす者のなかにも、それを支配社会への対抗的運動の拠点とみなす者もいれば[W. F. Whyte 1993[1943]=2000]、その結果として、支配社会が再生産を果すためのガス抜きの空間になるとみなす者もいる[P. E. Willis 1977]。支配社会との関連抜きにコミュニティを議論することは論外であるが、その関連についてはこのようにさまざまな議論がある。

ただこれらの議論には、2つの違和感が残る。1つ、コミュニティを形成する若者は、日々を懸命に生き抜いているのであり、それが結果的に支配社会への対抗であれガス抜きであれ、支

配社会への明確な対抗的意思にもとづいてそれらの実践が展開しているとはいいいがたい点。やはり、それらは、日々を懸命に生き抜くための拠り所と位置づけ、抵抗とは別次元でその意義を議論する必要があるのではないだろうか。2つ、他方でそれは衰退するだけのなんの活力もないスタティックな場所でもない。それは支配形態の変遷によって、ダイナミックに変化が生じるものの、消滅したり、その後再生したりするような場所ではない。よって、以下では先行研究におけるコミュニティ概念に代わるものとして〈地元〉概念を新たに提起したい。

### 3 概念の定義

#### 3.1 〈地元〉

鈴木謙介は「ジモト」を、若者の用語系の中で用いられる「自分の帰属先」として、出身地や友人とよくつるんで遊ぶ街をその例としてあげる。またその特徴を「地理的な境界というよりは、ある領域の中で培われた関係に基礎づけられた『物語』の位相であり、そして常に生きられることによってしか確認されないような、理念的なもの[鈴木 2008 : 211]」と説明する。今までの地域振興策は中央からのハコモノばかりで、結果的にそれは地域を活性化させなかった。それゆえに、「ジモト」の物語性から実在性を捉えようとする彼の意図は理解できる[鈴木 2006 : 101]。ただそれによって「ジモト」の実在性から始める議論が不要であるわけではない。彼も〈地元〉の物語性と実在性は両立しようと述べているように、「ジモト」に生きる人々の実践やコミュニケーションを成り立たせるための下からのニーズに応じた実在性とはいかなるものであり、それは「ジモト」の物語性といかに関連しあうのかという議論が一方で展開できるはずだ。

よって、ここでは〈地元〉の実在的な側面に注目して、〈地元〉を「中学校程度の規模の集団において同世代の仲間と数年間にわたって過ごす実体的な場所」と定義する。この定義で中学校程度の規模と、数年間にわたる期間を考慮したのは、新参者が社会化(例えば、先輩のシゴキや下積みに耐えて暴走族デビューすること)されるには、その規模の集団で、その期間にわたって行われることが、メンバーの代替不可能性を生じさせるために重要であると考えたからである。また実体的な場所も、実践やコミュニケーションの基盤として重要であり、具体的にはコンビニの駐車場、バイク倉庫などのいつもの仲間が集まる場所をさす。その結果、彼・彼女らの多くは携帯電話などではなく、〈地元〉という場所でつながりを維持する。その規模と期間と実体的な場所を持つという3つの条件によって、〈地元〉は形成される。そしてその条件が整えば、〈地元〉における独自のつながり、歴史、価値規範、言説、生活様式(服装やバイクなどの素材を含む)、アイデンティティ、そして物語などがダイナミックに形成されていく可能性がある。それらは、どこにでもある〈地元〉のどこにでもいる若者が、代替不可能な存在となるために必要なものである。このように実体的な条件から定義することで、〈地元〉概念のダイナミックな過程を把握することを目指したい。

#### 3.2 社会的排除

西澤晃彦は、社会的排除を「財や権限を既得する層・集団や国家権力が、特定の社会的カテ

ゴリーを資格外とみなし財や権限から締め出すこと〔西澤 2010：21〕と定義する。また彼は、「社会的包摂(ソーシャル・インクルージョン)は社会的排除とよく対置される概念である。包摂を排除の解決とみなす議論も多い。しかし、排除と包摂は、正確には対立するものではない〔西澤 2010：24〕と隣接概念との関係を整理する。その整理を踏まえて、彼は国民国家による権力的介入として「治療、隠蔽、抹殺」<sup>2)</sup>をあげ、現在は特に隠蔽が隔離(細分された人々を集合させ空間的に囲い込むことによる不可視化)から分離(隠蔽の対象となる集団を解体し、空間的に分散させることによる不可視化)へと変化しつつあると指摘する〔西澤 2010：29, 111〕。また西澤と岩田正美は、この概念の有効性を多岐にわたり説明しているが、ここでは以下の2つの有効性に注目する。1つ目、「貧困が、生活に必要なモノやサービスなどの『資源』の不足をその概念のコアとして把握するのに対して、社会的排除は『関係』の不足に着目して把握〔岩田 2008：23〕」する点。これによって、沖縄の下層若者たちにおけるさまざまな資源不足だけでなく、関係の不足やそこから締め出しにもアプローチが可能となる。2つ目、「貧困はパンを与えられることで解決される問題なのではなく、パンを奪い取ることで解決される問題なのだ〔西澤 2010：28〕」と述べられるように、この概念は記述概念にとどまらない関係概念である点。これにより奪われるだけでなく、奪い返したり、生き抜く営みにも注目できる。つまり、資源も関係も不足している沖縄の下層若者、なかでもここで扱う〈地元〉に拠点を持たない下層若者が、それでも生き抜こうとするプロセスを捉えることができる。

#### 4 調査方法

2007年4月から2008年3月までの間、沖縄で暴走族、ヤンキーの少年・少女たちへの参与観察を行った。地元を拠点とする暴走族・ヤンキーの若者たちとは、深夜のゴーパチで出会い、その後は彼・彼女たちの地元にあるアジトやコンビニ駐車場で継続的な調査が可能であった。彼・彼女らへの接触は一部携帯電話で試みたが、多くの場合、いつもの場所である〈地元〉に行けば、可能であった。しかし、本稿の調査対象である既存の〈地元〉に拠点を持たない下層若者たちは、(携帯を駆使する女子グループを除いて)いつもの場所でいつもの仲間とつながっているのではない。したがって、調査期間中ほとんど毎晩にわたりゴーパチを走り続けることで、偶然に出会うもしくは再会した時に話を聞くという形の調査となった。このような方法により、彼・彼女らのデータは一部断片的なものとならざるをえなかった。なかでも下で紹介するタクヤは、1度限りの聞き取り調査しか行えなかった。そのような制約はあったものの、慎重かつ想像力を駆使しながら実証作業を進めることで、そのデータ解釈の妥当性を保てるよう心がけた。

#### 5 既存の〈地元〉に属さない下層若者

沖縄の下層若者は、日本の下層若者同様に経済的搾取によって、時には労働力として、また時には余剰労働力として治療もしくは隠蔽の対象であった。それに加えて、かつてより沖縄の下層若者は、時には日本人として、またある時には非日本人として治療、抹殺の対象であった。

沖縄人は、その時の権力者によって日本人にも、沖縄人にもなってきた<sup>3)</sup>。そして沖縄の下層若者も、自らがいつでも非日本人としての沖縄人とみなされることをよく知っている<sup>4)</sup>。そしてその支配形態の切り替わりは、生活世界の細部にも浸透し、ここでは誰が一番強いかを常に見極め、瞬時に切り替え、従う状態をなめてきた。例えば、ユウキは以下のように語る。

(ある交差点でパトカーがギャラリーの中学生を追い払おうとした。彼らもなんとか逃げようとして、ゴーパチを横断し、ブロック壁を乗り越えたが、最終的にある1人の少年が捕まってパトカーの車内に連れて行かれた。その様子をユウキと見ながら)パトカーの中でしばかれてるよ(笑)。[本当に?]あいつら(警察官)、平気でやるよ。汚いけど捕まったらしょうがない。[そんなことないでしょ、巡査が中学生を殴っちゃあかんでしょ]まあ、ゴーパチで無茶苦茶したから、それはしょうがないやんに。留置所とかでも顔はあざにならないようにやられる(暴行を受ける)。家族の面会(が)ないやつは関係ないけどよ(関係なく暴行を受けるよ)。[訴えないの?]いみよー(なにいつてるの)。そんなしても意味ないよ。それより、次捕まらんのが大事。(ユウキ、10月19日深夜、浦添市コンビニ駐車場)

ここから、まず他者の支配する場所(パトカー車内、留置所)では、他者に完全に服従すること、他方で、ゴーパチ(ストリート空間)では両者がその主導権を争いぶつかり合う空間であることがわかる。そして、私がこれまでに行った調査から、〈地元〉は彼・彼女らの自治空間であった。そこにおける正しさ、ルールなどは強い先輩ではなく、長きにわたり〈地元〉に生きてきた先輩が、〈地元〉の政治を加味しながら決める。つまり、彼・彼女らは、場所を超えた普遍的な正しさ、規範に従うというより、その場所ごとの正しさ、支配者に従っている。これは、国家レベルで何度も捨てられ、また同化させられてきた沖縄社会だけの話ではなく、彼・彼女らの日常生活のレベルにもその影響を与えている<sup>5)</sup>。以下では沖縄の〈地元〉に生きない下層若者の生活世界からその影響をみていこう。

## 5.1 服従——マサキの生き抜き戦術

マサキは、27歳<sup>6)</sup>の暴走族OBである。外見でケンカが強いことがわかるほど、長身で筋肉質の男性である。彼は当時、「ちょっとした理由」で当分、家に帰れない状態にあった。また彼は、私が調査でお世話になった複数の暴走族のメンバーと親交があり(彼は私と会うたびに異なる暴走族と一緒にいた)、それらの暴走族少年らへの調査中に、たまたま数回会って話を聞く機会をつくることができた。

[昼は何してるんですか?]入院。[えっ、入院されてるのに、夜出てきて大丈夫ですか?]大丈夫よ。[バイクで事故ったんですか?]違うよ。右翼とケンカしてからに、ほお骨折。(ほおを触りながら)ここにまだボルトが入ってる。[えー、大丈夫ですか?]これで120万とれた。知り合いのあしばー(遊び人、ヤクザ)と一緒にやってからに。[殴られたんですか?]うん、正確には殴らせた(笑)。これで25万の医療費で1ヶ月入院できるからよ。働

くよりましたら。寝てるだけでじん(お金)入ってくる。[殴られたら、殴り返さないんですか?]なんでよ。そんなしたら正当防衛が過剰防衛になるでしょ。[はあ、けどやられたら、あとさき考えずやり返したい気持ちにならないですか?]そんなのガキ、今は殴られても、絶対殴らない。殴り返したら、じんとられるからよ。[でも痛々しいですね](今回受け取った)120万はひきあってるかな。自分から手を出したことはないよ。(2007年12月1日深夜、浦添市内マクドナルド)

彼は多くのケンカを繰り返した挙句、最終的にケンカは男らしさや他者からの承認といった存在証明のためにではなく、稼ぐ手段として確立した。これは沖縄でもめずらしい事例ではあるが、沖縄の現状を顕著にあらわす事例と位置づけられる。彼は他者が「事実」をつくることを前提とし、それを引き受けた上でいかに生きるかを模索している。彼は仮に自分が証言しても、それが「事実」にならないことを知っている。そしてこのような社会への向き合い方は、彼だけではなく沖縄の多くの下層若者にもあてはまるものである。ほとんどの沖縄人は労働者として治療、隠蔽、抹殺されるのに加えて、日本人になるための治療、そこからの隠蔽、抹殺が繰り返されるなかで、他者の支配する場所で抵抗せずにそれに従って生きざるをえなかった。彼は男らしさの存在証明にこだわり、けんかを繰り返すのではなく、生き抜くために体をはって力を持つ者に従ってきた。これが彼の生き抜き戦術である。

## 5.2 無化——エミたちの女子つながり

エミは、毎晩のようにゴーパチ沿いのコンビニ駐車場で暴走族見物を繰り返す18歳の少女である。その駐車場には、エミのほかにユウ(遅生まれの18歳)、サキ(19歳、妊娠のため高校休学中)、マリ(18歳、高卒)などが集まっていた。エミとユウは同じ中学校出身ではあるが、サキは南部、マリは北部からほぼ毎晩にわたりゴーパチに通っていた。このグループは、最初はそれぞれ数名で暴走族見物をしてしたが、いつも同じ場所で見物する他の女子のギャラリーにエミが声をかけたり、また知り合いに紹介してもらったりして構成されたという。また彼女たちは暴走族見物だけでなく、小型バイクに乗って暴走族を追いかけ、また将来的には暴走族仕様のバイクを所有することを希望しており、そのために貯蓄もしていた。

### 5.2.1 就労世界

[昨日の夜も暴走族見物しにきたの?]私いけなかった。仕事してた。[そうなんや、なんの仕事?]秘密。いえない。[飲み屋関係?]もっと言えない(笑)風俗じゃないよ。[今日は休みなん?]うん、週1だから。(エミ、2007年10月22日明朝、那覇市コンビニ駐車場)

[普段何してるの?]普段はこの時間は仕事してるよ。今日はたまたま休み。[仕事は飲み屋?]おさわり系ね。[いつからやってるの?]16歳から半年やって1年ニートして、またやってる。[最初のきっかけは?]家出かな。1ヶ月家出して、2ヶ月目に入った時まで家出して(この仕事を)始めた。(家出は)おばあ(祖母)と、一緒に住んでたからしかたないよ。[それで月にどのくらい稼ぐの?]60(万)かな。[すごいな]でも貯まんないんだよね。先週

は2週間で40(万)もらったよ。きつかったけど。(ユウ、2007年10月22日明朝、那覇市コンビニ駐車場)

(キセツに6ヶ月行って、久しぶりに沖縄に帰ってきた晩に)[バイク買うお金貯まった?]全然(貯まらなかった)よ。[機械工場に行ったんじゃないか?][名古屋のA社<sup>7)</sup>に6ヶ月の予定だったけど、働いてたら気がくるって2ヶ月で辞めた。すぐ帰ったらもつたないから。そのあと飲み屋で働いてた。][お金はそれでも貯まらなかったん?]毎晩飲んで給料は消えた。飲まんとやってけんし。稼いだぶん飲みみたいなの(笑)。結局、お水(水商売)で稼いだの全部なくなった。またしばらくは沖縄でニート(笑)。(マリ、2008年3月4日深夜、那覇市コンビニ駐車場)

3人の就労世界は、不安定かつ厳しい。エミの週1の仕事、ユウのおばあとの確執ゆえの家出がきっかけでとりついた仕事、またマリのキセツ先での転職には、移動をとまなう沖縄の少女特有の厳しさが垣間見られる。

## 5.2.2 恋愛と結婚

[ゴーパーチに来るようになったきっかけは?]バイク乗りの男がいいからよ(いいので)(笑)。[彼氏がバイクに乗ってたの?]最近(彼氏との関係が)終わったし(笑)…。[そうなんだ…]マジメな男がいい。一途な男ね。[元彼はまじめじゃなかったの?]あーあ…。男は浮気すんだよ、結局(笑)。(エミ、2007年10月21日深夜、那覇市コンビニ駐車場)

私たちホント男運ないよね。ユウなんて2こ上(2歳年上)の男と付き合っ、(その男性が)不倫だったんだよ。1年以上付き合ったけど、不倫だつてばれてから別れてるし。[エミは?]男が金(を)持ってくる。[いくらよ?]5万以上持ってきた。会うたび持ってくる。そのために呼び出されるみたいなの。[マジだよ?]けど、金よりデートドタキャン(直前に中止)はマジへこむ(本当につらい)。巻き髪して待ってたのにじらあ(笑)。(エミ、2007年11月6日明朝、那覇市コンビニ駐車場)

……

そんなの、まだまし、私なんて彼氏の誕生日にプレゼント買ってケーキ買って待ってたのに、他の女とカラオケ行ってたつてよ。……[お金の貸し借りもあるの?]私なんて、1回に10万だよ。返ってきたことがない。ぶっち(音信不通に)されたし。(ユウ、2007年11月6日明朝、那覇市コンビニ駐車場)

[今日もギャラリーしにきたの?]旦那とケンカしてからに、家にいたらわじわじ(イライラ)するからよ。あいつ(旦那)はキャバクラに飲みに行ってるばーよ。死に(とても)むかつく。[だいたい何時までギャラリーしてんの?]3時か4時までかな。[遅いね、大丈夫なの、お腹(の子ども)は?]たぶんよ。[それで、何時に起きるの?]昼かな、けどすごいんだよ、こんなでも毎朝お弁当作ってるからね。[すごい、けどやっぱし弁当作るより、しっか

り寝た方がいいんじゃないん？}そうだけだよ、そう決めればーよ。(サキ、2007年10月18日深夜、浦添市内のコンビニ駐車場)

彼女らも同世代の少女ら同様に、恋愛についての話題は盛り上がる。また失恋を繰り返し、その経験を友人と共有し笑いとばす点も共通しているように思われる。ただ、エミとユウのような金銭トラブルさえもが、(各個人で隠されるべきものではなく)共有され笑いとばされていることに、沖縄の少女特有の背景を読み取れる。またこの金銭トラブルや、「旦那」の深夜のキャバクラ通いの常習化にも、調査では何度も遭遇した。それにもかかわらず、彼女らは再びお金を渡したり、弁当を作ったりする、つまりパートナーとの関係を終わらせることは、選択肢としてあがらない。今のパートナーとの関係を、このグループで愚痴り、トラブルを無化することを通じて、なんとかしようとする。ここからは上と対照的に、移動の困難さから導かれる情報や社会関係といった資源が著しく制限される沖縄の少女特有の傾向がみだせる。ただこれらの移動をするか、しないかの違いは、どちらにせよ彼女らの意思によらない移動である点で大きく違わない。

### 5.2.3 将来展望

(上の仕事の話の続きで) [目標(金額)はあるの?] (間髪いれずに)400.400万貯めて新しい店を持つことがとりあえずの目標。[大変(な額)やね]今はそのための貯金と、将来貯金と、小遣いの3つの貯金してるし。[堅実やね]……[なんでそんなにたくさん貯金したいの?]いま金貯めて、将来生活できるようにしないと。[いつまで(この仕事)するの?]すぐ辞めるよ。将来は普通に働きながら暮らしたい。今の仕事楽だよ。キャバクラよりおさわりの方が楽(エミも強くうなずく)。(ユウ、2007年10月22日明朝、那覇市コンビニ駐車場)

[将来、何かしたいことある?]子どもが欲しいな。[主婦になりたいの?]そう、将来は主婦しながらレジ打ちで働きたい。けどサンエーは嫌。かねひででレジ打ち。[何が違うの?]かねひでが気楽でいい。(エミ、2007年11月6日明朝、那覇市コンビニ駐車場)

[旦那とはいつ結婚したの?]2年前から付き合っ、1年前に籍入れたばっか(り)。来年、結婚式やるよ。[(お腹が大きかったので)子どもが産まれてからじゃね]そう、今妊娠7ヶ月だし。[今何歳?]19。女子高生だよ、休学中だけ。(サキ、2007年10月18日深夜、浦添市コンビニ駐車場)

ユウもエミも将来は普通に、そして気楽に働きたいという。またサキも出産後の結婚式を楽しむにすら極めて「普通」の10代の少女だ。しかし、同時に彼女らは上で紹介した厳しい就労世界に生き、パートナーとのトラブルを抱えている少女でもある。そこから彼女らの「普通」を理解する必要がある。現在、彼女らは上述の就労環境にいるものの、そこで自ら収入を得て、貯蓄もある。またエミが金銭持ち逃げよりデートのドタキャンに落胆していることから、こ



こでも必要以上の収入を稼ぐパートナーではなく、「普通」のパートナーを強く求めているようにみえる。しかし、ある意味でこの「普通」を追い求める態度は金銭を求める以上に、彼女らの判断を鈍らせている。

このようにみると、彼女らが暴走族見物をしなが、現状への不満を無化し、将来への不安や展望を共有する女子つながりは、彼女らにとって重要な役割を果たす。それらを行う場所は、彼女らが直面する問題を判断するための基盤になるし、もしその判断を誤ったら、それを無化する基盤にもなる。これは既存の〈地元〉ではないものの、規模も期間も実体的な場所も備えつつあることから、彼女らは新たに〈地元なるもの〉を形成しつつあるといえるだろう。

### 5.3 漂流——タクヤの絶望と希望

タクヤは左耳のピアスが似合う24歳の青年である。彼もマサキ同様に暴走族の調査中に、偶然に出会った。この日、彼は名古屋のキセツ先で出会った2人の青年と一緒にゴーパチに来ていた。暴走族見物は毎晩しているわけではなく、たまたまその日は暇だったので来たという。また連絡先は彼の事情により教えてもらえず、彼への聞き取りはこの日の1回限りである。しかし、彼は自らの歴史や考えを、丁寧かつ詳細にそして熱心に語ってくれた。

#### 5.3.1 社会への絶望と希望

(テレビを見ていて)自民党がどうか、どうでもいい。手っ取り早いのが、みんな1回死ねばいい、リセットしないと1回。マスコミもどうでもいい。朝青龍なんか、もういいだろう。(テレビの討論番組などの)話し合いが一番嫌い、話す前に動いて感じ。(相手)せめてはっきりで、次に進まない。……(以前働いていた新宿・歌舞伎町では)人一人死んだって、みんな気にしなかった、所詮みんな人間だもん。[いつからそのように考えるようになったの?]表の仕事と、裏の仕事のみて考えるようになった。人間を見てきて、そういう…。じゃんけんで全部決まればいいのに…。手っ取り早いから、1回みんな死ね。(2007年9月3日深夜、宜野湾市のマクドナルド駐車場)

彼は1時間あまりの聞き取りのなかで、「みんな、1回死ねばいい」と何度も嘆いた。沖縄に生まれ、10代の頃から沖縄の建築現場、そして新宿・歌舞伎町で、もがきながら生き抜いてきた彼の生活史から確認できるのは、彼の前に立ち塞がる、彼にはどうしようもできない壁の存在である。このおそらく何度も乗り越えようとしてきたであろう、この壁を前に、彼は「みんな、1回死ねばいい」と嘆いているようにみえる。

自分、(ヤクザにからまれて)何回か死にかけた。[なにしたんですか?]歌舞伎町でヤクザの女をキャッチ(客引き)してからに、リンチにあった。いきなり後方から殴られてよ、2週間意識不明。救急車で運ばれたみたいよ(笑)。[マジですか?]これが、歌舞伎町のルールよ。……[すごい街ですね]あっちにいる人はみんな頑張ってる。恥ずかしさを捨てて、やるのが大事。気にしたら負け。(同上)

他方で彼はこのようにも語り、その人生から「恥ずかしさを捨てること」、「気にしたら負け」といった信念を学び取り、それを日々抱きながら生き抜いていた。彼は地元<sup>8)</sup>に基盤を持つ暴走族やヤンキーではない。地元<sup>8)</sup>に属することなく、深夜の暴走族見物と、キセツを繰り返していた若者である。

タクヤはなぜ上のような社会への絶望と希望を持つにいたったのか。彼の言葉は、平等を強く求めているが、そのようなことが突然に起こらないことも彼はよく知っている。だからこそ、彼はさまざまな状況で何度も折れかけた気持ちを、その人生から自ら勝ち取ってきた信念を頼りに生きてきたようにみえる。

### 5.3.2 就労世界における漂流、実家との絶縁

[仕事は何かしてるんです?]今はしてないよ。この前(キセツ先の名古屋から)帰ってきた。[昔は何かやってたんです?]18歳のころ1年、(建築)現場で働いてたよ。[そうですか、現場はきついですよ?]沖縄は特にね。[内地と沖縄の現場で違いがあるんですか?]給料は簡単にいえば、2倍。普通の仕事は1.5倍。[そうですか、今はなにしてるんですか?]いまは失業保険があるんでちょっと待ってる。(内地の給料と比較しても張り合う)建築なら沖縄で働くこともある。給料、上がらないけど…。[内地での仕事はなにがきついですか?]キセツは行ってみると話が違うことばかり。仕事がきついことより、その日ごとに仕事が変わることがきつい。[そうですか。]有給がないとか、祝い金(季節労働満期終了時にもらえるボーナス)がもらえないとかもあるよ。キセツは途中で帰るときは、給料不払い、飛行機代自腹はしょうがないですよ。引き合わないけど、その覚悟で行ってますから…。……(キセツ先でのひどい対応に我慢できずに)友だちのーに(兄)が、事務所を荒らしたってよ。今の世の中、人間は生きてるだけ、警察もそうよ。小さいところ(会社)だと、別に違う人を呼べばいいし…。……(新宿歌舞伎町はみんなの目が)一番いきいきしてる。昼間は目が死んでるけど。(夜の)歌舞伎町は(目が)生きてる、みんな楽しそうだし…。あつちは輝いてる、沖縄は輝いていない。(同上)

彼はこのように沖縄の建築現場と歌舞伎町を行き交いながら、両者の間を失業保険でつなぎ合わせながら生きていた。また実家との関係について以下のように語る。

[実家には帰ってるんですか]実家とは絶縁した。みんな金ないと変わりますよ。[どういうことですか?]いい家庭に生まれれば、まじめに生きるし、借金ある家庭に生まれたら、虐待です。金ないと虐待です。[はあ…。]うまくいかんと人にあたる。それを意地出して頑張っていくかが人間です。もっとひどい人はたくさんいるし。まあ、人間なんてちっぽけですよ。北朝鮮に比べると、日本はまだましですよ。親がしっかりしないと、いじめとか。そこで残酷になるか、やさしさを保てるかが問題です。これは自分の考えです。親みたいにはなりたくなかった。人と一緒にされるのが一番いやで…。残酷になるんだったら、同じことの繰り返しじゃないですか、そんなんでは、一生変わらない。……[普段は何してるんですか]昼から夜8時までは家にいれるけど、それ以外は外に出てる。[えっ、

なんでですか]親がいるから。[はあ]家にいたら、身元が割れるから。(同上)

彼にとっては就労世界も実家も拠り所ではないようだ。またこの日、一緒に来ていた青年たちも彼にとってはいつもいるような仲ではないようだ<sup>9)</sup>。彼はある特定の場所を拠り所とせず1人で漂流するなかで、たまに不安になると北朝鮮や親、そして沖縄と歌舞伎町との比較を繰り返しながら、そこに希望を見出し、そして自ら見出した信念を支えに何とか生きてきた。1回限りの聞き取りからは強引な解釈かもしれないが、このような生活史、そして社会への視角、態度は、かつての永山則夫ときわめて類似しているように思われる。永山は1965年に集団就職で青森から東京に出てきた青年である。その動機にはタクヤ同様に青森から飛び出て働くことへの希望が見出せるし、その後実際の仕事に絶望してしまうことも重なる。また東京に行くことで貧困と豊かさの圧倒的なギャップに直面する[永山 1990; 見田 2008]。両者が異なるのは、タクヤが歌舞伎町に希望を見出し、親文化を乗り越えることを見据えて、沖縄を否定しつつも沖縄に帰るのに対し、永山は自らが否定する、育った青森に再び帰ることはなかった点である。タクヤにとって否定すべき〈地元〉とはいかなるもので、それとの再接続の可能性はないのか、以下で考えてみたい。

#### 5.4 まとめと考察

上で暴走族やヤンキーが主に活動する場所としての〈地元〉を、その規模と期間と実体的な場所によって定義した。それは〈地元〉に生きる若者にとっての代替不可能性を重視したためである。そして、〈地元〉を、暴走族、ヤンキーだけでなく〈地元〉に属さない若者からみること、そこで代替不可能性が生じる条件をみていきたい。それぞれの事例を再度確認しておこう。

マサキは、けんかでは誰にも負けないが、そのおかれた立場にもとづく弱さを逆にとり、それを武器にして生きている。マサキは暴走族OBであるために、いまでもかつての仲間と会おうと思えば会える関係にある。独自の生き抜き戦術を確立する過程でも、彼の「あしばー」が重要な役割を果たしている。上で〈地元〉を成り立たせる3つの条件について述べたが、マサキの事例からは一度〈地元〉は形成されると、その仲間と実体的な場所で会う頻度が少なくとも、物語としての〈地元〉が時間軸を超えて持続的に維持されていることを確認できる<sup>10)</sup>。これを〈地元〉の時間的持続性と呼ぶ。

また既存の〈地元〉は男性社会であり、そこからエミらの女子グループは排除される。ただ彼女らは現状への不満を無化し、「普通」の将来展望を共有する、既存の〈地元〉を超えた拠り所を創出していた。彼女らの事例からは、弱さをもとに特定のメンバーで一定期間にわたり特定の場所での活動を確認でき、それは中学ごとの暴走族をもとにした既存の〈地元〉ではないものの、空間を超えて新たに〈地元なるもの〉を創出している。これを〈地元〉の空間的持続性と呼ぶ。これらの時間と空間を超えた持続性から、〈地元〉は不変的であることを確認できる。

またタクヤはその生活史から、恥ずかしさを捨て、気にしないという信念を確立した。彼の事例からは、自らの弱さなど気にせずに、漂流されながらも突き進む姿勢と、それに支えられたアイデンティティを確認できる。他方で、タクヤはまだ若く以前にも特定の暴走族やヤン

キー集団に属していないことから、マサキのようにかつての〈地元〉に思いをめぐらせることはできない。また現時点で、暴走族のような「固まる」集団を毛嫌いしていた。ただ、彼の確立した信念と親文化を乗り越えようとする執念を支えるために、〈地元〉か、それに変わる実体的な場所の獲得は、欠かせないだろう。

ここでは、その場所の獲得のきっかけにつながりうるものとして、〈地元〉の開放性と、〈地元〉の柔軟性について述べる。前者は、警察に一斉補導されて壊滅状態の暴走族少年を近隣の他の暴走族が一時的に預かるつもりが最終的に欠かせないメンバーとなった事例にみられる〈地元〉の開放的な性質であり、後者は、かつては会うたびにケンカしていた隣町のライバルが今では腐れ縁になった事例にみられる〈地元〉が柔軟に変化する性質である(両方の事例ともに、今回の調査期間中に多数確認した)。タクヤが〈地元〉の開放性によって、〈地元〉へと新たに接続されたり、また〈地元〉の柔軟性によって、既存の〈地元〉の同世代の若者と敵対的関係を結び、それが契機となりつながることも考えられる(もちろん〈地元〉とは異なる場所の獲得の可能性もある)。そしてこれらの〈地元〉へのアクセス可能性が生み出される条件こそ、〈地元〉のダイナミズムにある。なぜなら〈地元〉がダイナミックであることによってはじめて、〈地元〉は単純に閉鎖的な場所でもなく、また同質的な者のみが集う場所でもない(むしろ、同質的な者である以前にどこにでもいる若者を代替不可能な存在にする)ことを保障するからである。

これら3つの事例の若者たちは、いずれも既存の〈地元〉に属していないものの、そこからは時間と空間を超えた〈地元〉の不変性や、〈地元〉へのアクセス可能性を生み出すダイナミズムを確認できた。そこで〈地元〉はダイナミックであると同時に不変的でもある。上で〈地元〉を実体的な条件によって定義したが、それはあくまでもその実体的な場所に人間が生きることで独自の文化、言語などが形成されるダイナミックな過程に注目したためである。実体的な条件だけをみていると、それは人間の移動によって消滅も、また新たに誕生もしているようにもみえたかもしれない。しかしそこに生きる人間が真正な水準で営む実践に視点を移すと、ダイナミズムのなかの不変性がみえてくる。つまり〈地元〉やその周辺における若者の生き方は、ダイナミックに再生産を繰り返し続けるという意味で変わっていない。以下では、この平凡な結論から、現代社会のありようを考えてみたい<sup>11)</sup>。

## 6 考察——〈地元〉の不変性とダイナミズム

### 6.1 〈地元〉の不変性——生き抜く場所としての〈地元〉

上で示したように、沖縄の下層若者には現状を変える力はないし、その手段も方法も今のところ持たない。彼・彼女らはただ懸命に日々を生きており、それが運動へと展開する可能性は今のところ少ない。そうであるなら、彼・彼女らの生き抜くための実践を、支配社会への対抗軸として読み込むことは難しい。また〈地元〉は恒常性や過剰な流動性に陥らずにバランスよく維持できる、支配の流動性に対抗する完璧な場所ではない。3つの事例からも、それらは現代社会の趨勢に対して、明確な抵抗の意思を抱くための基盤ではなく、折り合いを付けながら、それに服従し、無化するための基盤であった。そこには、〈地元〉の時間と空間を超えた不

変性を確認できた。

他方で、現在はマサキの観念的に維持されている〈地元〉や、少女らによる〈地元なるもの〉を維持すること、またタクヤによる〈地元〉へのアクセスがより困難となっていることもまた事実である。現在ではなんとか確認できた生活世界としての〈地元〉を失う、もしくはその維持が極めて不安定な状態にあり、それを獲得する意思を長期にわたって失うことは、考えられる。そして、それは社会的存在である人間の死を意味し、物理的に抹殺(自殺)させられる／もしくは永山が起こしたような事件に展開する可能性も否定できない。事実、殺されていった沖縄人も多数いる。そして、下層若者でありかつ既存の〈地元〉に属さない彼らは、そのむき出しの暴力に直面していることも忘れてはならない。

## 6.2 〈地元〉のダイナミズム

〈地元〉は抵抗の拠点というより、懸命に生き抜くためのギリギリの場所であることを上で確認した。そしてそれは支配の形態に応じて、誕生したり再生したりするものではなかった。その生への抗いが抵抗へと発展する図式を前提とすると、包摂のひとつである治療や物理的隠蔽である抹殺におけるコミュニティの意義や、その支配の形態の変遷を通じたコミュニティの不変性とダイナミズムを見過ごすことになる。

実際に沖縄の下層若者は、治療の支配形態のもとでも日本の都市部で同郷コミュニティを形成してきたし、隠蔽の分散の支配形態のもとでも地元の暴走族やヤンキー集団を形成した。そして、極めて抹殺の支配形態に近い既存の〈地元〉に属さない個別化された若者も、懸命に〈地元〉へアクセスしようとしていた。このようにみると、西澤のような支配の強度によって展開される隠蔽から排除、そして抹殺へとという時系列にそった説明では、〈地元〉の不変性とダイナミズムが生じる過程をつかむことは難しい。よって、排除以外の支配の形態における〈地元〉はもちろん、〈地元〉に準ずるものや、それへのアクセス可能性を説明する必要があった。

## 6.3 真正性の水準に注目して

最後に、上の不変性とダイナミズムの関連を整理するために、以下ではClaude Levi-Straussの「真正性の水準」に着目する。彼は西欧社会によって急激に解体されつくされたかにみえた〈未開〉社会が西欧社会と同型の構造をもつことを数学的に示し、西欧社会のものを見方を相対化してみせた。そして、「真正性の水準」という概念は、彼自身もいうようにその過程で重要な位置を占めている[C. Levi-Strauss 1958=1972: 409]。彼は、「〔〈未開〉社会は——打越〕他の社会よりはるかに重要な度合で、人と人の関係、つまり個人のあいだの具体的なつながりに、基礎をおいているということである。……〔他方で、近代人の社会は——打越〕一人の人間が他の一人によって具体的に理解されるということにもとづいてはいない。われわれ〔近代人〕の人間関係は、かなりの部分、書かれた資料を通じての間接的な再構成にもとづいている[C. Levi-Strauss 1958=1972: 407]」と述べて、2つの社会の真正さの水準の違いを指摘する。そして、彼は原理的には社会の規模の(数でいうと500人か3万人か、具体例でいうと町会や村会か国会かといった)違いによって、それら2つの社会を質的に区別する[C. Levi-Strauss

1958=1972 : 409; G. Charbonnier 1961=1970 : 55-6]。

ところで、上でコミュニティをめぐる議論を紹介したが、それらの議論で見落とされてきたのが、この「真正性の水準」への着目である。よって、ここではコミュニティを真正性の水準から見直し再構成した概念として、〈地元〉を提起する。

西欧のユース・サブカルチャーズ、もしくはアメリカ都市の下位文化が、熱い社会で形成され拡大、発展、多様化へ向かうのに対し[K. Gelder and S. Thornton 1997; C. S. Fischer 1982=2002]、沖縄の暴走族、ヤンキー、そして本稿の若者らにとっての〈地元〉は冷たい社会を基盤に現状維持の再生産を専らの活動としているのが特徴的であった<sup>12)</sup>。そして、ここで上述した〈地元〉が中学校区規模の集団であるということが、重要となる。なぜなら〈地元〉やそれに新たにアクセスする若者は、なにかの唯一無二性を備えた若者ではなく、どこにでもいる近隣の若者であったからだ。〈地元〉を支えているのは、すごい能力や固有の文化を併せ持つ若者ばかりではなく、その大部分はたまたまそこで育ってきた特別に取り柄もないように思われる若者であり<sup>13)</sup>、また〈地元〉に準ずるものに新たにアクセスするのも、たまたま同じ中学校区で生まれ育った「ツレ」であったり、たまたまゴーパーチで出会ったりした若者であったからだ。ブリコラージュとは本来の目的を流用して他の目的にあてはめることであるが、それに倣うと〈地元〉は、エンジニアによってではなくブリコルールによって支えられていることがみえてくる。重要なのは、真正な水準にある〈地元〉やそれに準ずる場所で、最初はありあわせであったメンバーが代替不可能なメンバーへと変わっていくことである。この変化の過程を小田亮は以下のように説明する。

真正なレベルでも非真正なレベルでも、社会を成り立たせるには代替可能な役割連関(ハイデガールのいう道具的連関、デュルケームのいう有機的連帯)が必要である。けれども、それだけで成り立っている非真正な社会とは違って、真正な社会においては、役割連関に代替不可能性・交換可能性が滲みこんでいく。ただし、真正な社会の共同体に代替不可能性・交換不可能性が現れるのは、オリエンタリズム的な共同体概念において考えられているような共同体の閉鎖性によるものではなく、時間的な持続可能性ないしは「持続の期待」によるものである。[下線——打越]……直接的な関係が持続すると期待されるときには、代替可能で交換可能であるはずの道具的連関や役割連関において、交換不可能・代替不可能な関係が作られていくのである。[小田 2009 : 230, 232]

このように、市場や学校ではいくらかでも代わりのきいていた若者は、同時に〈地元〉では代替不可能な「ツレ」となる。小田は共同体における時間的な接続可能性ないしは「接続の期待」によって代替不可能性・交換不可能性を説明するが、それは本稿が〈地元〉をその規模と期間と実体的な場所によって定義した点と大きく重なっている。物語や固有のアイデンティティの獲得が、代替不可能性を生み出すというより、特定のツレと具体的な場所で一定の時間を過ごすことで、それは生み出されている。前者が際限ない比較を通じて、固有性や、唯一性、個性などを追い求めるのに対して、後者はそれらを必要としない。柄谷行人の整理に従えば、〈地元〉やそれに準ずる場所における代替不可能性は、一般性・同一性のなかの特殊性とは異なる

という点で、過剰な流動性には陥らない。また歴史の一回性や固有名における「この」性から導かれる単独性であるという点で恒常性にも陥らないものである[柄谷 1994 : 12-5]。

このように〈地元〉の周辺に位置づけられる下層若者から確認できた、〈地元〉の時間的・空間的持続性、そしてアクセス可能性からは、〈地元〉概念の不変性とダイナミズムを導くことができる。〈地元〉は抵抗の拠点や、そのために発展していく場所というより、当面は現状維持の再生産を反復する場所であり、その意義を指摘することはまったくラディカルな提案ではないかもしれない。ただ、その指摘は強烈に限度をしらない現在のグローバル資本主義下における沖縄の下層若者たちが、限られた資源を用いてダイナミックになんとか生きていくという不変性を具体的な文脈から提示し、現代社会におけるその意義を明らかにしたという点で、変革の可能性を追究することと同様に重要な作業といえるのではなからうか。

## 7 今後の課題

ここで取り上げた3つの事例の過程を、丁寧におっていくことが引き続き重要な課題である。〈地元〉へのアクセスは開かれているとはいえ、仮にタクヤが長期にわたって拠り所を持たないとすれば、やはりそれは深刻な困難さをとまなう。今回の調査からは見逃してしまったことも含めて、今後の彼、そしてエミラのグループ、マサキが生き抜く世界の内実をおっていききたい。

また、大きな課題ではあるが、沖縄の下層若者の存在を知った日本人の抵抗についても考察をすすめていきたい。タクヤは何度も「みんな死ねばいい」と嘆いていた。彼は圧倒的な不平等とその固定化に直面し、社会の根本的なリセットを望んでいた。その嘆きからは、彼が日本人との共闘を求めていると推測できる。なぜなら彼は、共闘することは不平等を解決させずに、その再生産を導くことを感得したからこそ、分配の平等化などの制度の修正ではなく、根本的なリセットを望んでいると考えられるからだ。また彼は親文化を懸命に乗り越えようとしていた。それゆえに、その困難と限界も知っていた。彼はそこにある不平等は一部の沖縄人、もしくは一世代の沖縄人では、解決できないものとして捉えている。この嘆きは、そのような背景から発せられている。事実、彼の嘆きとそれが発せられた背景は、今まで維持されてきた日本と沖縄の不平等のありようを映し出している。いままで共闘の手は一部の沖縄人にしか差し伸べられてこなかったこと、日本人はどの沖縄人と共闘するかで沖縄を分裂させてきたこと、自らの既得権益を守るためにのみ一部の沖縄人を取り込んできたこと。これらは実際に生じてきたことでもあり、また彼の嘆きからも導かれることでもある。これらをふまえれば、日本人と沖縄人のそのような思惑に基づいた非真正な水準における共闘ではなく、真正な水準における日本人同士の分裂とその後の共闘をこそ実現する必要があるのではなからうか。それこそが、沖縄と日本の平等を達成するための第一歩となるのではないだろうか。

### [注]

- 1) 親の職業もまた年収も知らない彼・彼女らを下層若者としたのは、以下の理由による。1つ、10代の頃から実家との関係が不安定であること、2つ、その結果、極めて厳しい仕事に就く、もしくはは

それに代わる手段を選択せざるをえないこと。それゆえに、彼・彼女らは生活が著しく困難であり、階層としては下層であると判断した。

- 2) 「治療」：学校、軍隊、工場あるいは家庭など閉鎖的空間を用いての規律・訓練(M・フーコー)によって組織・定住領域へと人々を誘導し、「よき国民」を仕立て上げる操作。「隠蔽」：治療と運動しつつ、治療に値しない非国民的な存在を組織・定住領域から社会的・空間的に隔離し「よき国民」との接触をミニマムにして不可視化するもの。「抹殺」：まどろっこしい隠蔽を補完して、直接に「よき国民」の正義を実現しようとする。抹殺においては、実際に物理的に殺戮したり領土から追放することによって、対象が消去される[西澤 2010 : 108-11]。
- 3) 日本／沖縄について。まず日本国を沖縄と日本をあわせた領域とする。そのなかで沖縄を現在の沖縄県に該当する領域、日本は沖縄県を含まない領域として定義する。現在、沖縄県は日本国の一部であるが、本稿の沖縄と日本は重複しない。本稿でこのように区分するのは、それぞれの領域に住む、住んできた人々の間にある圧倒的に不平等な関係に着目して議論を展開するためである。今までに沖縄と日本の境界はさまざまに変遷してきたが、他方でこの境界は主に日本人が定めたものであり、沖縄人には全く動かすことはできないものである。
- 4) 「昔よ、米軍のハーレーと事故ってからよ。そんな時、無免(無免許)でパト(警察)にくまらされて(つかまって)からに焦ったけど、アメ公はアメリカへ強制送還されて。[えっ、なにそれ逃げたの]違う。事故そのものがなかったことになって、俺の違反も取り消しになった。でーじ(とても)ラッキーじゃない。[嘘でしょ、そんなのありえない]沖縄は特別だから…」(2007年9月5日深夜、北谷市のゲームセンター前)

この超法規的な出来事は、彼にとってはラッキーであったが、同時に沖縄は日本の法律を超えたものによって支配されていること、そして自らはその前に無力であること、警察も絶対的な権力ではないことを彼に教えている。この他にも、キセツ先での身体的特徴をもとにばかにされた経験などによっても、彼らは沖縄(人)と日本(人)は違うという感覚を強く持っている。
- 5) 例えば、彼らが経験したり伝え聞いたりしたことなく、警察・メディアが共謀して作り上げたものが「事実」となる経験は、彼らの日常では頻繁に起こる。調査中に生じたある交通死亡事故は、翌日の地元紙には「浦添署の調べでは、二台のバイクは前部が大破していることから正面衝突したとみており、一方のバイクが逆走した可能性があるとして事故の原因を調べている。〔琉球新報〕2007.12.4夕刊)と掲載されたが、目撃したジョージによると逆走した暴走族のバイクをパトカーが執拗に追い詰めたことが原因だという。このような経験は、彼・彼女らの日常でたびたび生じている。
- 6) 本文中の年齢はすべて調査中の2007年当時のものである。
- 7) マリは友人に紹介してもらってA社を選んだ。その決め手は、A社で働く者のほとんどが沖縄、北海道出身者であり、それによって職場の雰囲気は他と比べていいからという。
- 8) 「〔暴走は観るだけですか〕自分、暴走族違いますよ。自分は固まるのが嫌なんですよ、縛られるのが嫌で…」(タクヤ 2007年9月3日深夜、宜野湾市のマクドナルド駐車場)。
- 9) 後日、一緒に来ていた青年らにタクヤのことを聞くと、あの晩はたまたま一緒にいただけで普段一緒につるむことはあまりないと教えてくれた。
- 10) 今までの暴走族を対象とした参与観察からも、このような事例を確認できている。



昔のツレには、全部話すわけではないよ、聞いたらしんどくなるのがわかるから。全て話す必要ないで…。奥さん大変で、子どもが怪我とかでは連絡とらん。子どもが死にそうな時だけ電話くれという縁や。ツレってのは腐れ縁。嫁を超えてる。(ある暴走族OBの青年、2007年12月8日、那覇市)

- 11) 以前、私はネオリベリズムの流動性によって生じる人間の代替／比較可能に対し、〈地元〉における暴走族少年らは代替／比較不可能な存在であることをもとに、それらの実践を反抗として扱い議論を行った[打越 2008, 2009]。これは、流動性に対する恒常性の軸ではなく、ネオリベリズムにおけるナショナリズムなどの恒常性を誘発させる流動性に対し、どちらにもよらない方法によって、〈地元〉では代替／比較不可能が生じていることを示したものである。
- 12) 欧米の若者が自らを表現する手段も道具も素材も持たないために、他者との差異で自らを位置づけようとするのは、若者文化において普遍的であるようにみえる。ただそれらの「〇〇でない、なにか」をいくら繰り返しても自らの固有性なるものが永久に見つけられないこともまた自明である。この点からしても、ユース・サブカルチャーズ研究における、代替不可能が生み出される〈地元〉への着目は可能性を持っている。
- 13) つまり、暴走族は下層若者である新参者を意図的にスカウトしているのではないのだ。下層であることは、暴走族に入る条件ではない。実際は、下層であることによって学校や家庭で積極的に囲い込みがなされないため、すべての階層の若者にひらかれている暴走族がそれらの若者を引き受けている。その結果、暴走族における下層若者の割合は高くなる。

## 【文献】

- Claude Lévi-Strauss, 1958, *Anthropologie Structurale*, Paris: Librairie Plon.(=1972, 荒川幾男ほか訳『構造人類学』みすず書房。)
- Claude S. Fischer, 1982, *To Dwell among Friends: Personal Networks in Town and City*, Illinois, U.S.A.: The University of Chicago.(=2002, 松本康・前田尚子訳『友人の間で暮らす——北カリフォルニアのパーソナル・ネットワーク』未來社。)
- Georges Charbonnier, 1961, *Entretiens avec Claude Lévi-Strauss*, Librairie Plon.(=1970, 多田智満子訳『レヴィ＝ストロースとの対話』みすず書房。)
- 岩田正美, 2008, 『社会的排除——参加の欠如・不確かな帰属』有斐閣。
- 柄谷行人, 1994, 『探究Ⅱ』講談社。
- Ken Gelder and Sarah Thornton eds., 1997, *Subcultures Reader*, London and New York: Routledge.
- 見田宗介, 2008, 『まなざしの地獄——尽きなく生きることの社会学』河出書房新社。
- 永山則夫, 1990, 『無知の涙 増補新版』河出書房新社。
- 西澤晃彦, 2010, 『貧者の領域——誰が排除されているのか』河出書房新社。
- 小田亮, 2009, 「共同体と代替可能性について——社会の二層性についての試論」『日本常民文化紀要』27: pp. 219-60.
- Paul E. Willis, 1977, *Learning to Labour: How Working Class Kids Get Working Class Jobs*, Ashgate Publishing.(=1996, 熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房。)
- 鈴木謙介, 2006, 「〈情報〉が地域をつくる——メディアが拓くコミュニティの可能性」丸田一ほか編『地

域情報化——認識と設計』NTT出版, pp. 88-108.

——, 2008, 『サブカル・日本の新自由主義——既得権批判が若者を追い込む』筑摩書房.

打越正行, 2008, 「仕事ないし、沖縄嫌い、人も嫌い——沖縄のヤンキーの共同性とネオリベリズム」  
『理論と動態』1: pp. 21-38.

——, 2009, 「植民地沖縄におけるネオリベリズムと反抗——ヤンキー・サブカルチャーズ研究序  
説」『部落解放』15: pp. 73-90.

William Foote Whyte, [1943]1993, *Street Corner Society, Fourth edition*, Chicago, Illinois, U.S.A: The  
University of Chicago Press.(=2000, 奥田道大・有里典三訳『ストリート・コーナースサエティ』  
有斐閣.)

Wirth, Louis, 1938, *Urbanism as a Way of Life*, *American Journal of Sociology* 44: 1-24.(=1978, 高橋  
勇悦訳「生活様式としてのアーバニズム」鈴木広編『都市化の社会学』誠信書房.)

(うちこし・まさゆき 首都大学東京)

## 【欧文要約】

### Unchangeability and Dynamism of *Jimoto*: Through Okinawan Underclass Youth Surviving out of *Jimoto*

UCHIKOSHI, Masayuki

Tokyo Metropolitan University

karp@mail.goo.ne.jp

Okinawan underclass youths have encountered colonial violence under global capitalism. Therefore, they have suffered economical poverty and disorganization of their life-world. Meanwhile, some youths have survived in their life-world, *Jimoto*, as *Bosozoku* with members of the same generation. In this paper I define *Jimoto* as a material place where youths in the same junior high school spend a few years. More concretely, I explain *Jimoto* in three aspects. First, the scale of *Bosozoku* in *Jimoto* is commonly composed of 10 to 20 members. It is an appropriate scale for them because they make a group based on the junior high school in their hometown. Second, they practice some activities including joyrides for at least two years in *Jimoto*. And finally, it is a material place like a parking lot in front of a convenience store.

These days in Okinawa there are many underclass youths surviving out of *Jimoto*. In this paper, I understand *Jimoto* not just as a simple community but also with new aspects; an unchangeable yet dynamic community, from their point of view. And I examine their contemporary significance. In urban sociology or cultural studies, the community is regarded as a disorganized place, as a base of resistance movement against exclusion and of degasification whose function is to maintain social structure. Such an understanding of *Jimoto* is not based on the *criteria of authenticity* and overlooks the unchangeability and

dynamism of the community. Therefore, I point out the unchangeability of *Jimoto* over time and space, and its dynamism which lets them connect to it. Finally, I indicate the significance of *Jimoto* or its substitute not as a disorganized place, base of resistance and degasification, but as place where those youths can have a mission-critical existence.

Keywords: Okinawa, *Jimoto*, criteria of authenticity